

「それは主だ」

サムエル記 3 1・18

少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主が語られることはまれで、幻を見ることもあまりなかった。ある日、エリは自分の部屋で寝ていた。彼の目はかすんで見えなくなっていた。神のともしびはまだ消えておらず、サムエルは神の櫃の置かれている主の神殿で寝ていた。その時、主はサムエルをお呼びになった。彼は「はい」と答えて、エリのもとに走っていき、「はい、お呼びでしたか」と言った。エリは言った、「わたしは呼ばなかった。戻って寝なさい」。それで彼は戻って寝た。主は、再びサムエルをお呼びになった。サムエルは起きてエリのもとに行き、「はい、お呼びでしたか」と言った。エリは言った、「わたしの子よ、わたしは呼ばなかった。戻って寝なさい」。サムエルはまだ主を知らず、主の言葉は、まだ彼に示されていなかった。主は三度サムエルをお呼びになった。サムエルは起きてエリのもとに行き、「はい、お呼びでしたか」と言った。その時、エリは、主が少年をお呼びになっているのだと悟った。そこでエリはサムエルに命じた、「行って寝なさい。もし、また呼ばれたなら、『主よ、お話してください。あなたの僕は聞いております』と言いなさい」。サムエルは自分の場所に戻って寝た。主はおいでになり、そこに立たれ、前の時と同じように、「サムエル、サムエル」とお呼びになった。サムエルは言った、「お話してください。あなたの僕は聞いております」。

主はサムエルに仰せになった、「見よ、わたしはイスラエルの中に一つのことを行おうとしている。それを聞く人はみな両耳とも耳鳴りがするであろう。その日、わたしは、かつてエリの家について告げたすべてのことを初めから終わりまで、エリに対して果たそう。わたしはエリの家に永遠の裁きを下すと彼に告げた。彼は息子たちが神を冒瀆しているのを知りながら、それを責めなかったという罪の故である。それ故、わたしはエリの家について誓った。エリの家罪は、犠牲や供え物をもってしても永久に償うことはできない」。

サムエルは朝まで眠り、それから主の家の扉を開けた。サムエルは幻についてエリに告げるのを恐れていた。エリはサムエルを呼んで、「わたしの子、サムエル」と言った。サムエルは、「はい」と答えた。そこでエリは言った、「お前に語られたことは、どんなことだったのか。さあ、隠さずに言いなさい。もし、お前に語られたことを一つでも隠すなら、神がお前にそれ相応の罰、否、それ以上の罰を下されるように」。それでサムエルは包み隠さずすべてをエリに告げると、エリは言った、「それは主だ。主がみ心のままに行われますように」。

少年サムエルの話は、誰が読んでも心が温かくなる内容です。エリが弟子のサムエルを心から慈しみ、その召命を心から喜んだことが想像できます。同時に、エリは息子たちの愚行、それを見逃した自分の罪を受け入れます。人が主に罪を犯すなら、誰も人のために執りなせないことをエリはよくわかっているのです。エリの苦悩は想像に難くないですが、私たちはここから学ばなければなりません。